

---

# 流星のロックマン Precious Partners

Neil^Dylandy

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

流星のロックマン Precious Partners

### 【Nコード】

N1597BA

### 【作者名】

Neil^Dylandy

### 【あらすじ】

人が生き、人が死に、世界が変わり、未来が変わる。それが世界に三度もあった。大いなる災いを乗り越えた人類は4度目の災いに遭遇する。人はこの危機にどう立ち向かうのか。散りゆく戦火の世界の中で少年は己の答えをどんな形で導くのか。反抗と信頼。全ての感情が一つとなるとき、星河スバルの物語は始まる！！

## #01 反抗の凱歌

「ハア、ハア、ハア！！」

少女が激しく息を切らしながら足を動かして走り続ける。額には汗がにじみ出て、顔には疲労の色が濃く出ていて、身体からは血を流していた。

周りは電波で構築された世界。パルスワールド。電波を物質化されている。見た目は何もない森のようだ。だが、これは見かけだけで中身は何にもない。外見だけが完璧な物だ。

それをかいくぐるように少女は逃げて、身体の傷口から悲鳴をあげるような激痛と身体の全身から無限に湧き上がる疲労に耐えながらただ足を動かし、逃げ続ける少女。

「逃げるな！！この落ちこぼれで裏切り者のノルスヴァイドめ！！脱獄した罪の容疑で貴様を殺す！！」

突如、後ろから電波体が現れた。その電波体は片手に槍、片手に盾を所持し、身には鎧をまとっていた。恐らくこの電波体が所持している物、全てが電波を物質化した擬似的な物だろう。遠くから見るとまるで門番のような風格があらわになっていた。きっと、この少女を捕まえるためにこの追手は少女を追っているのだろう

「私は……私はこんな作戦……認めない……っ……。私は生きて地球に向かう！！」

少女は腹の底からありったけの力を振り絞って叫ぶ。だが余計に身体にのしかかる疲労を大きくしただけだ。負担が増え、身体の内部分から逆流してきた血反吐と胃酸がでてくる。

呼吸も荒い、目の前が意識朦朧、そして目の前には自分を殺そうとする同じ電波体。

もう、ここまでかと少女は悟る。でも、まだ死んでない。死んでないという事はまだ己の事をやり遂げれるという事だ。あきらめるにはまだ早い。もがいて、もがいてまだもがく。命ある限り、もがける回数はいくらでもある。まだだ、私は死ぬのはまだ早すぎる。

『ユイ！大丈夫か！！』

恐らく少女の相棒であろう、電波体がその少女の名を呼ぶ。

それを聞いた少女は相棒を心配させないように必死で起き上がる。動く度に体から血が噴き出す。

身体を起こすだけで目眩が起こる。

「大丈夫……だよ。まだだ……フリースト……電波変換……しかない……」

『クッ……電波変換はユイの身体に負担が多すぎる！！ここで使うわけには！！』

「やらないと駄目だ！この……状況を……打開……するにはっ！！……電波変換しかないんだ！！」

もはやそれしかないとフリーストも理解していたようだ。だが電波変換というのはこの少女の肉体に大きな負担がかかるらしい。けど、やらないと死んでしまう。

少女の眼に迷いはない。相棒を手の上にのせて、電波変換をした。電波変換した瞬間、辺りは白い閃光に染められた。それにより追手の眼は白く焼かれてしまった。

いわゆる目くらまし。殺さずに逃走。視界を奪った瀕死の少女は即座に地球へ向かっていった。

相棒のフリーストと共に。

少女の電波変換の姿。それは全くどこにもない未知なる姿だった。

「うぐっ……………」

場所は太陽系列木星付近コスモウェーブ。そこに電波変換したままの少女がいた。右腕を隠すかのように悶える少女。電波変換の反動で肉体が答えたのだらう。右腕に激痛が走り続けて少女を激痛の混沌へと誘っていた。

「でも……………どうにか脱出……………できたね……………」

『ああ……………奇跡と呼ぶしかないな。運命の神様に感謝だ』

「さ、一分、一秒もつたいない。早く地球へいかなくては」

そう言っつて少女と電波体は大いなる災いを起こることを知らせに『地球』という生命でありふれた惑星へと飛んで行った。

## #02 お目覚めの悪い英雄

空を見上げれば綺麗な春の空。

大地が綺麗に緑の色へと色づけて。耳を澄ませば小鳥のさえずりが聞こえてくる日中。

街路樹は桜のつばみが膨らみかけている。もう少しで咲く頃だろう。この満開の桜の木の下で花見ができればどんなに最高な事か。春の訪れを感じていた相棒。

「お〜い、起きろ〜！〜！〜！〜！〜！起きろ！起きろ！」

「う〜ん……後5分ほど寝かしてよ〜春休みなんだからいいじゃん別に〜」

と父親、星河大吾が息子を起こそうとし、息子、ツンツン頭が特徴的な今作の主人公星河スバルは睡眠の欲求に打ち勝てずに寝たがっている。この時期は春休みだ。スバル達コダマ小学校は無事5年生の活動を終了し、最上級生へと進級した。その進級するまで少しの期間があるため、その期間は春休みだ。

春休みだからってぐうたら過ごしてはいけないと父親が起こしに来たのだ。

だが息子は寝たがっている。時間は9時を過ぎたころ。世界の英雄がこんな時間帯までぐ〜ぐ〜と寝ているようでは、世界の英雄としての威厳が全くない。

ちなみにスバルはメテオGの事件解決以来、国内では大変な有名人となってしまった。有名度ランクではあの大人気ソロシンガー響ミソラを簡単に凌駕するほどの立ち位置にいるらしい。そんな尾ひれのついた活躍がいやだったりする。家をでれば取材を受けることになったりと色々と大変な日々を過ごしていた入りする。

[illegible]

「ええと……」

スバルが布団の中で潜り込みながら父親の問題に答え始めた。父親はこれを狙っていた。２つの事、布団を掴みながら「起きろ！」と連呼した台詞を数えるなんてこの息子じゃ並行作業は無理だろうと思っていたからだ。

「**今だ！！**」

父親は宇宙が描かれている布団を奪い取り、眠りから起きの世界へと一気に救出しようとする。

それでも起きない。まるで猫みたいにまるくなつて体から熱を逃がさないようにしていた。さすがの父親も啞然。最終手段に出た。それは目覚ましのアラーム音。

不快な音が永遠と鳴り響き、その音が空気を伝って少年の鼓膜を振動し、不快な音波を脳へ叩き込む。

間接的だが、効果のある技。少年は逃げるように起き上がった。

「春休みなんだからいいじゃん!」

「ダメだ。世界を3度も救った英雄がそんなんでいいのか？」

「もう戦いは終わってたじゃん」

父親は呆れてしまった。

これじゃ全く威厳なし。なんだこの世界のヒーローは。あのWA  
XAっていう自分自らヒーローぶってるあいつに見せたいくらいだ

ぜと呆れてしまう大吾。

隣にはそれに同感するようにいつの間にか佇んでいるA M星人ウオーロック。青い体に鋭い目つき、性格に少々問題ありでスバルのウィザードである。いつの間にかいたのだろう。スバルのハンターV Gと呼ばれる携帯端末から自分の意志でウィザードオンして出てきていた。

『大吾、コイツなんか変わったな』

「戦いが終わったからだろ。緊張の糸が切れたんだ」  
『そうだろうな』

男同士の短い会話がすぐに終わり、大吾はその筋肉が沢山ついている丈夫な右腕を最大限に使ってスバルの首根っこを掴んでリビンクに強制連行させていく。朝ごはんを食べさせるために。

それを見ていたウオーロックは父親の危なっかしさに驚いていた。息子の首根っこを掴んでリビンクへ強制連行。こんな力オスな光景は星河家以外どこにもないだろう。

「いただきます……」

父親に強制連行されたスバルは朝食を一人さびしく食べていた。冷たくなったご飯に冷たい魚。そして何故か温かい味噌汁。

温度差の激しくてさびしい朝ごはんだった。

「ほら、早く食べて着替えなさい。全く、スバルはお寝坊さんね」

エプロン姿で手についた水をエプロンのポケットに付けているタオルで水をふき取りながらこちらに歩いて来た。恐らく自分が速く食べ終わるのを待っているのだろう。



正直なところ、やめてほしかった。手荒な起こし方をされたためである。だが、これはすべて自分の巻いた種であることは自覚済みなのだが。

「は～～い」

そう言っスバルは黙々と朝ごはんを食べて行った。ようやく取り戻した平和の日常。

そして父親は家族との約束を裏切らずに7年以上の時を経て無事に帰ってきた。

ようやく取り戻した家族の日常。家族の時間。

けどそれは短い休憩時間。

災いが足音を立てずにゆっくりと近づいてくるのである。

### #03 ニホンの有名人

「あ~~~~~暇~~~~~だ~~~~~」

スバルは悶絶する。天気の良い空。花粉が舞ってない優しくほんのり暖かい風。

絶好のお出かけ日和だ。なのに少年は何にもすることがない。暇で暇で暇で暇すぎて仕方なかった。やることないし、宿題は乗り気じゃない、てかやりたくない。なんか誰か来てくれないかな~~~~とそんな願望を抱きつつ部屋で寝返りを打った次の瞬間。スバルのハンターV.Gからホップアップが現れた。

どうやらメールが来たらしい。期待を抱きつつ、メールの中身を見る。

「委員長かな？それともゴン太？キザマロかな？」

スバルが喋った3人はかけがえのない親友である。一人一人ちょっとした残念な部分があるものの、絆は深い。けど、メールの送信した人は委員長でもなく、ゴン太でもなく、キザマロでもなかった。じゃあ、一体だれが？決まっている。あの有名なあの少女だ。

「ミソラちゃんからか……………」

スバルが呼んだミソラという少女。彼女は響ミソラといい、ニホンでは有名なシンガーだ。何故、この時期に少女からメールが来たのか。それが気になり、メールの中身をダウンロードして拝見する。電子メールの本文はこんな短い文章がつづられていた。

「久しぶり スバル君。突然だけど遊びに来ていいかな？返信待ってます。byミソラ」

スバルは何故か朗読していた。しかも無意識に。年代の女の子から。しかも有名で可愛い少女から受け取った1通の電子メール。なんで自分は朗読しているんだと、羞恥心のなさに顔を真っ赤にするスバル。まあやることないし至って暇だし、来てくれるなら話し相手にでもなるだろう。

スバルは「遊びに来てもいいよ」と短い文と顔文字を文末に添えて返信した。

すると次の瞬間、ピンポンと星河家のインターホンが鳴り響き、来客が来たと知らせる。

まさかと思いつつ、スバルは部屋からリビングへと向かう。予想的中、考えたことが現実になった。

「あら〜ミソラちゃんじゃない。いらっしやい。スバルならいるわよ〜」

そう、返信して間もないのに玄関の外にはあの少女が佇んでいるらしい。

スバルの母親、星河あかねはインターホン付近にいるミソラを自宅へ誘った。自宅のオートロックを解除してミソラを星河家へ招待する。丁寧に靴を脱いで、脱いだ靴を揃えて、スリッパを履いてリビングへと向かう。小学生にしてはマナーがしっかりとっていた。

この少女の第一印象、まずは癖のない綺麗な桜色の髪、そして綺麗で透き通るエメラルドグリーンの大きな目。僅かに桜色に色づく唇に、真っ白い素肌。僅かだが大人の階段を登りかけている面影が見える。

そして次に目がいくのは背中にあるギター。自分がライブする時

に使う自分専用のギターであり、特注な為、どこにもない。

だが、その少女のギターに幸福な思い出に反して、不幸な思い出も詰まっている。

「ミ、ミ、ミソラちゃん来るの早すぎるよ……………」

スバルは啞然としている。それは当たり前だ。自分の電子メールを返信した3秒後に自宅のインターホンが鳴り響いたのだから。簡単に言えば、ミソラは星河家の前で待機し、スバルの時間が空いてるかとメールで問い合わせ、許可が出た瞬間に星河家を訪問した、ということになる。

この少女は星河スバルに淡い『恋心』を抱いているが、実際の所、星河スバルという少年は裏では英雄の威厳のないぐうたらでだらしない人だ。

その事実を少女はまだ知らない。

「だって、スバル君とせっかく遊べるんだから一分、一秒も無駄にできないしい……。今日は私とスバル君でデートするつもりできたし……………」

ミソラは顔をほんのり赤らめて、手を前で組んで下を向きながらそう言った。それを聞いた星河家の両親は含み笑いをしていた。スバルはさらに啞然。

さあ過去を振り返ってみよう。電子メールの内容を振り返ってみよう。『遊びに来ていいかな?』とメールの本文にはそう綴っている。だが『デートしよう』という異性の子が和気藹々とするハッピーイベント的な事は全く書かれてなかった。確かに二ホンの有名人とデート、しかも恐らく二度目のデートであるだろう。ロツポンドーヒルズ以来だ。

「え……？もしかしてデート……だめだった？やっぱり突然は悪かった……かな？」

ミソラは上目遣いでそう言ってきた。恋心を抱く一人の少女の信念は大地を揺るがすほどすごいらしい。スバルにとってこのミソラの上目遣いはギャラクシーアドバンス、インパクトキャノン3枚分の威力だった。その少女の可愛くて器用な気を誘うような仕草を見た両親の目はますます愉快でたのしい目をしていた。きっと二人の頭の中では将来安泰だなという気持ちとか、女を泣かせたら罪だぞという気持ちがある中ででていた。

まあ、暇だしいいかと思っただらしない英雄、星河スバル。

「まあ……待つて。すぐに必要最低限の道具を持ってくるから

」

そう言つて、スバルは二階へと向かった。いや逃走した。緊張と健気な少女のはかり力抜群の仕草に耐え切れずにスバルはノックアウト寸前まで来ていたのだ。

部屋に辿り着いたスバルは心臓がかなり大きな鼓動を打っている。顔を真っ赤にしていた。

それを見たウォーロックは自分の思ったことを露わに言う。

『スバル……もしかしてお前、アイツの事好きなのか？』

一瞬の沈黙が部屋に駆け巡る。ウォーロックにはあまりにもストレートすぎる質問。スバルは拳動不審になっていた。手が震えていて、机の引き出しにしまつてあつた財布を上手く掴めずにいる。

「そ、そ、そんなこ、ことない、い、よ！」

『分かりやすい奴……』

スバルは顔を真っ赤に染めて必死の言い訳をした。けど焦ってしまい、何回も噛んでしまった。ウォーロックはスバルの慌てた仕草に小さくボソツと呟いた。彼をこれ以上刺激させないために。これ以上刺激させたら失神してしまうかもしれないからである。

スバルはその場をとつと立ち去るようにハンターV.Gと財布を所持して、余計な邪魔者をウィザードオフしてリビングに向かつていった。

「待ってたよ、スバル君！ささ、早くスピカモールに行こうよ。ウェーブライナーの乗車時間が過ぎるから」

「あ、待ってよ、ミソラちゃん！！」

少女はせかすように先陣を切って星河家を颯爽と出て行き、少年は消えた友達を追いかけるように家を出て行った。リビングでは二人の祝福の音が小さく上がってたりした。

そして、おいかけてこをするように二人はあっという間にウェーブライナーの停留所に辿り着いた。そして丁度よく、ウェーブライナーのバスが来る。

機械の排出音と共にウェーブライナーの乗車バスのドアが開く。そしてバスの中に乗った二人。

この最新技術で作られた交通手段。ウェーブライナーのバスは時速600Km以上の速さで目的地に僅かな時間で辿り着く。600Km以上もスピードも出てれば目の負担が大きいだろう。その配慮も考えて、バスの中の構造は負担が少ないつくりになっている。僅か13分。本来ならかなり先にある大型ショッピングセンター、

スピカモールもウェーブライナーのバスさえあれば余裕綽々に着く。手ごころな時間で辿り着いた二人は適当に道を歩いた。まず向かった場所、女の子がいるなら当然絶対行く場所、それが洋服店だ。実はこのスピカモールは4階に洋服専門店が立ち並んでいる為、おし

やれ好きな人が結構集まっていたりする。ミソラもお年頃の恋を抱く一人の女の子。やはり外見を気にしていたようだ。

「ねえねえ、スバル君。この洋服どうかな？」

彼女が手に取ったのはかわいいワンピース。ミソラはきつとスタイルがいいのだろう。どんな服を着ても可愛く見えてしまう。4、5年後がちょっと楽しみだなといけない考えを抱いてしまった星河スバル。

だが、大概女の買ひ物は非常に長いもの。これはお約束的なことだ。デートで来たらそうなるだろう。女性が男性を引っ張って、強制的に付き合わされて、女性が好きな洋服で一人ファッションショーを開きかけたりなど、人によって時間の個人差はあるがデートというのはそういうものである。

そんな時間が1時間半も過ぎた。ミソラが会計に行っている間、スバルの視界にある洋服店の入り口で一人の『見たことのある金髪のツインテールでロールがかった少女』偶然うつった。

それを見たスバル。一瞬で頭の中の危険信号が緑から赤へと急に変わって、危険信号音がうるさく鳴り響く。

「あら、星河君。どうしたのこんなところで？家族とお買い物にでもきたの？」

「え……………いや……………」

スバルはその『見たことのある金髪のツインテールでロールがかった少女』に運悪く見つかったしまった。この少女は白金ルナという少女だ。金髪が最大の特徴であり、その独特な髪型が第二の特徴である。彼女は人の前に立ってやることをするのが非常に多い。そして短気で『ロックマン』に恋心をいだく一途の少女でもある。

だが、その短気っぷりは凄い。これまでスバルはその少女の飛び

火を何度浴びてきたことか。恐らく両手の指じや足りないだろう。  
スバルはうつすらとだが死の危機を感じていた。

「違うの？じゃあ誰と？」

「え……………いや……………だから……………あの……………その……………非常に申しあげにくいんですが……………」

「なんなの？」

ルナはさらに一步前に出てスバルに近づく。何かを焦らすスバルにルナは若干イラついていたりした。

スバルも非常に言いにくい。あの国民的アイドルとデートでここに来ましたと言ったら、きっと彼女の地雷を間違はなく踏んでしまうだろう。恐らく右腕もつていかれるかもしれない。

そんな気持ちでいた世界の英雄。

そこに絶望の波乱を巻き起こす一人の美少女が割り込んでくる。

「スバル君！！会計終わったよ……………つてルナちゃん！？お久しぶり〜〜」

「あ、ミソラちゃんお久しぶりね、元気にしてた？」

「さ、最悪だ……………！！！！！！僕の人生はバッド・エンドで終わるのか！！」

そう、最悪な事が目の前で起きてしまった。響ミソラがこの場に來てしまったのだ。非常にまずい。デートでここに来ていたとなったらあの少女はなんていうだろうか。

スバルは最悪な気持ちに浸ってしまい、心の中で人生、バッドエンドという結末が見えかけていた。

一体、何される？僕の舌出して、顎に向けてのアップercットの



体罰か？それとも玉ねぎ皮むき500個かな？

「ところでミソラちゃん、どうしてここに？」

「えっと、それはね」

一瞬の刹那、三人の沈黙が走った後、少年は少女の地雷を踏んでしまった。

不幸で最悪だった。口で散々言われてしまった。もう学校に行きたくない、という気持ちになってしまった星河スバル。

そんな感じで二人のデートはいろんな意味で最悪かつ和気藹々とした結末で終えたのだった。

「はあ……………もう最悪だった……………」

『あのドリル女も分かりやすい奴だな』

「ロツク……………他人事だと思って……………」

『俺には関係ないし』

時間は夜、すっかり日も沈んで、ミソラとも途中で別れてウエーブライナーバスでコダマタウンの停留所に下車したとこだ。

こんな時に限って相棒は何の役にも立たない。最近、スバルがちよつと愛想良くしたからって調子のとてるかもしれないウォーロツク。

無限に出てくる溜息と、無限に湧き上がる精神駅疲労が少年の身体を締め付ける。

「ちよつとコダマタウンの展望台に寄り道していくかな」  
『分かった』

重い足取りで一步、また一步とスバルは足を運んで、綺麗な夜景が見られる展望台へと足を運ばせた。

展望台の入口を通って、階段を登り、テラスにあがりこもつとし

た瞬間、テラスの一人の少女がいるのにスバルは気が付いた。その少女の背中には大きな月が重なって月の光と夜の暗さで見えなかったが、っその少女は茶髪の髪をしてて、短い短髪の少女だった。スバルが展望台のテラスに来たと察したのか、少女はスバルに場所を譲るように消えて行ってしまった。

スバルはもしかして気に障ったと思ってしまったがその気持ちはすぐに消えてしまった。

今日も綺麗な空。あの座標にあの星は……あった。

「なんだろ？あれは？」

『どうしたスバル？』

スバルは北の空に一つの大きな青色の星が輝いているのが見えた。あの座標にあんな不気味な星なんてないと思った宇宙マニアのスバル。

「なんか不気味だね……」

『ああ……不吉な事なんて起きなければいいんだが』

二人はそんな心境で北で怪しく光る星を見つめていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1597ba/>

---

流星のロックマン Precious Partners

2012年1月14日18時52分発行